



(2016年、ロシア・モスクワ開催の国際フェンシング連盟総会にて、著者参加。写真中央下)

『ROAD TO 2020～組織委員会/スポーツマネジャーからのメッセージ～』

「フェンシングのオリンピックメダルが増えるまで」

皆様は、オリンピックで実施される「競技 (sport)」「種別 (discipline)」「種目 (event)」は、各大会ごとに決められてきたのはご存知でしたか？オリンピックの長い歴史の中で、この「競技」「種別」「種目」の数は途中で途切れたり復活したりを繰り返しながらも、その存在価値の高さから大会が開催されるたび徐々に増えていきました。しかし、大会全体が増大傾向にあった2000年頃、国際オリンピック委員会 (IOC) はこれらの数へ上限を設けるようになったのです。

一方、フェンシング競技は、近代オリンピック第一回から各大会で採用され続け、3種目だった当初から徐々に増えていきました。1996年頃には10種目になりましたが、この10種目が当時IOCから課された上限となったのです。

その間、スポーツ界全体で男女平等の取り組みが強まり、フェンシングでも女子エペや女子サーブルが国際フェンシング連盟 (FIE) の公式種目となります。「フルーレ」「エペ」「サーブル」に、「男子」

と「女子」が勢ぞろいし、さらに各種目に「個人戦」「団体戦」が生まれ、FIE 公式種目は合計 12 種目となり、世界選手権大会等で全種目の開催が実現されていきます。

しかし、オリンピックでは 10 種目しか開催できないため、FIE は、過去 3 回のオリンピック（北京・ロンドン・リオ）にて、団体 2 種目（男子団体と女子団体を 1 種目ずつ）を順番に除外することで、各大会を 10 種目に収めていました。そしてロンドン大会が終わった頃、世界のフェンシング界では、「リオ大会が終わったら、次の大会（東京）から同様に除外ローテーションが採用されてしまうのか」といった声があがるようになります。

一方で 2014 年、一つの風が流れます。オリンピックに新たな価値を付加させたい IOC は、世界規模で運動離れを危惧される若者に着目し、若者が好むような都市型の競技の追加を検討し始めました。併せて、既存競技の種目数や男女比を見直し始め、2020 年東京大会の競技数と種目数の上限を撤廃し、すべての国際競技連盟（IF）に対して種目の再検討と新提案を求めました。その時に IOC が IF へ課した条件は「オリンピック開催時の競技日数を増やさないこと」「選手数を変えないこと」。これを受けて FIE は、競技日数や選手数については条件を守りながら、全種目開催を目標に IOC へ提案します。ついに 2017 年 6 月の IOC 臨時総会にて、次回の東京大会では 12 種目すべてが開催されることが承認されました。私見ですが、ベストなタイミングで瞬時に IOC へ訴えることができたのは、遅れて導入された女子エペと女子サーブルが、既存の 10 種目に引けを取らない程の急成長を遂げたからではないかと思えます。

オリンピックへの出場選手数や出場基準はまだまだ課題があります。例えば現在は、団体種目への出場を決めれば団体戦出場者は自動的に個人戦にも出場できる仕組みになっています。今の選考基準では、団体戦に挑めない国には門戸が狭くなってしまっており、まだまだ個人戦出場者しか存在しない選手団は、自国の NOC（各国オリンピック委員会）から強化や普及のための補助金や助成金を十分に受け取ることができていない状況に直面しています。IOC や FIE としても、これでは国数増加（ユニバーサルティ）に繋がりません。

さて、全 12 種目が幕張会場で繰り広げられる 2020 年東京オリンピック。メダル獲得のチャンスがさらに広がった中、全種目それぞれに存在する注目選手たちが、最高のパフォーマンスを発揮してくれそうです。時差を感じることなく、その瞬間を直接目撃し、皆様のご声援を、選手たちにお届け頂きたいです。